



大雪山の動物

— 保護の視点を中心に —

小川 巖

国立公園地区だけに限っても、広大な面積を占め、多様な環境からなっている大雪山地域の動物について語ることは容易でない。ましてや、限られた誌面ですべてを紹介するなど不可能というものだ。そのうえ、鳥類の生態学を専攻している私自身の守備範囲はまことに狭い。したがって、今回は網羅的に解説することは避け、表題にあるように、動物の保護の視点を中心とした大雪山地域の問題点を若干述べてみるにとどめたい。大雪山の動物相については、これまでにかなりの報告がなされているので、興味のある方はそれらを参照していただきたい。

さて、大雪山系の地理的位置、広がり、標高などを反映して、動物相の豊富さにおいては北海道で屈指の地域であるとともに、個体数は少なくても分布上、特異な位置を占める動物も多い。大雪山の自然保護を論ずるに当って、まず第一に、このような「特異種」をどう保護するのか、第二に道路建設、治山工事、観光施設の増加など様々な「開発」によって生ずる環境の変化が、動物相にどう影響するかがまず問題になる。従来、自然保護側の動物についての主張は、ともすれば前者の立場、つまりナキウサギ、ミニビゲラ、ウスバキチョウといった「貴重」な動物の生息場所としての大雪山を守らなくてはならないという域を出なかつたように思えるのは、私の偏見だろうか。昆虫ではダイセツヒカゲ、ウスバキチョウ、アサヒヒョウモン、^ニダイセツオサムシなど、鳥ではミニビゲラ、ギンザンマシコ、ハギマシコ、哺乳類ではナキウサギなどが代表的である。

大雪山の持つ重要さを手短かに説明する方便として、これら「貴重」な動物をかつぎ出

すことは一向に構わないとしても、動物保護の論理を開発側、無関心な人達を説得していくには、ほとんど意味をもたないのではないだろうか。こういった立場が、「ナキウサギが開発か」というような本質から程遠い形で取沙汰される道を開く危険性については、すでにいくつもの先例がある。われわれ保護を主張する側にも、相当の責任があったことを反省しなくてはなるまい。

そうなる、先に述べた第二の立場、つまり様々な「開発」による環境の変化が生物相、とくに動物相にどんな影響をもたらしてきたか、その結果、どのような影響が予測されるかが重要な視点になってくるように思われる。

山麓から山頂を目指す林道建設、それと平行して進められる森林の伐採（それも大面積皆伐）、砂防堰堤工事からはじまってロープウェイ、リフト、観光施設という具合に、過去から現在にいたる大雪山の歴史からみれば、きわめて短時間の間（おそらく数十年くらいのもの）に、非常な変貌を経験させられた。一つ一つの工作物や施設自体は、広大な大雪山全域からみればほんの「点」にしか過ぎないという。道一本作ることは、たかだか幅一〇メートル足らずに過ぎないから心配は無用という。しかしそれらの行為がどんな波及効果を持つかについては、完成後の経済効果は計算に入れても、無視されてしまふ。

例をあげてみよう。山岳地帯の林道建設において不可避的に出てくる多量の土砂は、まず例外なく谷川に乗る。切りとった法面は放置しておくか、さもなければ外来の牧草（ツメクサ、ライグラス、オーチャードなど）を吹きつけて事足れりとする。堰堤、

護岸、ダムの建設は、魚類の湖上を妨げ、河川をコマ切れのタメ池にしてしまう。観光施設は当然のこととして、山奥にあつても「文化」生活を必要とするから、それに見合った設備を作らなくてはならない。ゴミ、尿尿は思い思いのやり方で仕末するとなると結局はタレ流しをするよりはかはない。大量の観光客は、ヤマハハコ、オオバコなどの外来帰化植物の「運搬屋」の役目も担うし、植生の「破壊屋」にも変貌する。素晴らしいと感嘆した同じ場所を、自らの手で汚してはばからない……などなど。

これらが個別に発生するうちは、なんとか手のほどこしうもあるかも知れない。けれども、これらが単一で問題になることは考えられない。道路を無理に通そうとすれば川に土砂がたまり堰堤工事の口実となる一方、道路はバカげた数の人間を山に運び上げる。こうして資本の論理が主役のなしくずしが、エスカレートしていく。箱根を、上高地を、そして立山を見るがよい。こうした責任はどこにあるのか。行楽客、観光業者、土木業者だけではなさそうだが、このような分り切ったことさえ切りすて、「開発」を推進した行政の怠慢といわざるをえない。

動物の面から「開発」の影響がどんな形で現われるかは、まだじゅうぶん解明されていないが、私の知るところを記してみると——大雪山に分布するチョウは十四、五種類といわれている。チョウは、極端といえるほど食草（餌にする植物のこと）に依存している場合が多い。ウスバキチョウはコマクサ、アサヒヒョウモンはキバナシャクナゲという具合に。入山者の増加は、チョウの捕獲（建前としては大部分の地域での捕獲は禁止されているが）、食草の破壊という二重の意味で、強大な圧力をかけていることになる。

さらに登山者、観光客が棄て去る残飯を当てる動物も「作り」あげた。麓から「新天地」を求めてやってきたカラスから、ゴミ棄て場が集まるようになったシマリス、キツネ、そしてヒグマさえ、餌を通して彼らの生活が大きく変えられてしまった。シマリスが残飯を集まるのは、人間と動物の「壁」がとり払われたと歓喜の声を発する人々もヒグマがそうすれば、恐怖して一大ニュースに仕立てあげる。山麓から千数百メートルの標高にかけての溪流には、大体において下流域にイワナ、上流域にオシロコマが分布している。堰堤による河川の寸断、各種の工事による土石の流入が、これらの溪流性魚類にどんな影響を及ぼすかは思い及ばない。確かにいえることは、相当な勢い

でこれらの魚が減少していることだ。釣り人の増加もさることながら、環境の絶えざるしかも急激な変化（人はこれを環境破壊というのだろう）は、人の目につくと否にかかわらず、確実に生物相のうえに大きな影を落としている。

現在みる生物相が定着するのに、きわめて長時間かかったのと同じ意味で、いったん破壊された環境の「治癒」には、やはりそれに見合っただけの長時間を要するとみなくてはならない。きわめて長い時間軸を想定した場合、大雪山の特異な景観が現状のままでありえないだろうことは、生態学的にみて断言できそうだが、その運動自体を「自然保護」と称して止めることは無意味というものだ。そのような自然の遷移に任せることを認めなくてはなるまい。

しかしそれ以前に問題なのは、その遷移にゆだねられるより遙かに早いスピードで、急速かつ急激な変化がもたらされるし、まさに現在、その途上にあることだ。自然の遷移がどういふ過程を踏むかについては、これまでの生態学の理論、知見から大よその見当はつくが、人間によって強制されるせつちちな「遷移」については、結末が破壊を招くという予測以外出ていないこともはっきりしている。自然破壊の「先進地」本州の出来事を二、三思い出せばじゅうぶんである。

ナキウサギやミビゲラが大雪山系から姿を消しても、その時から人間が困ることなど何一つないのも事実である。それを目ざとく見越したうえで開発する側は、飯でも食べるがごとく当り前に道をつけ、ロープウェーをつけようとする。一種や二種の動物が大雪山から姿を消したところで、それが一体なんなのだとわんぱかりの居直りがチラついてはいる。しかし、ある種の動物が住めなくなるといふことは、彼らの住み場所が生存在に耐えられないほど破壊されたことで、それはたとえ絶滅にいたるような深刻なものでないにしても、他の動物に多大の影響を及ぼさずにはおかない。それどころか、野生の動物のみならず、回り回って人間の生活に直接かわりをもつ災害を誘発する危険性さえ、指摘されつつある。

具体的な動物保護の「論理」は、現在混沌のさなかにあるといつてよいだろう。いくつかの理由が考えられるが、その理由の一つは、特定の地域の動物を問題にする際、そこに分布する珍種といって悪ければ、「稀少種」に注目して、その生息地としての「保護」に頼り過ぎたことに由来してはいないだろうか。たとえば、一部の学者にとっては意

味があるかも知れないが、コモチカナヘビが分布しているからサロベツ原野は「保護」しなければならぬなどといえるだろうか。この種の動物の「学術上」の重要性を説いているのだとしても、それでは説明不足というものだ。

それでは私自身に対案があるかといえば、返答に困るといなのが本音である。しかしおぼろげながらいえることは、個々の種類をとりあげて、その「貴重」さ、重要性を説くというより、大雪山の生物群集そのものの「貴重」さ、つまり大雪山に生きるすべての生物を「込み」にした自然保護の展開を予感する。大雪山を住み家とするウスバ

キチヨウも、ナキウサギもノゴマも、そしてヒグマもすべてそろってこそ、大雪山の特徴なのだ……。

それには、なせルリビタキ、シジュウカラ、シマリスなどのように普通に見られる動物が不可欠のかを、外に向ってというより、われわれ内部の問題として議論を積み重ね、深めていくところから出発しても遅くはあるまい。

(北海道大学農学部応用動物学教室・大学院生)